

氏 名 : 策力格尔
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博甲第 251 号
学位授与年月日 : 平成 27 年 3 月 17 日
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士
学位論文名 : 現代オルティン・ドーの変容
ーパフォーマンスに関わる諸要素の分析の視点からー
論文審査委員 : (主査) 准教授 遠藤 徹
(副査) 教授 渋谷 英章 教授 小野 康男
教授 本多佐保美 教授 加藤富美子
教授 横山 和彦 (東京音楽大学)

学位論文要旨

本論ではモンゴル民族の自然な芸術形態であるオルティン・ドーが舞台芸術音楽への発展している音楽的文化変容の現象、つまり異なる音楽の要素の影響をうけて新たな芸術スタイルを作り出した現象を研究するものである。本論の問題意識は「民俗音楽」であったオルティン・ドーが急速に消滅しかけているという危機意識から由来したものだが、決して消滅の危機を誇張する意味ではなく、変化の必然性についての語りを試みたい。変化とは避けて通れないものであり、本研究では今日起きている現象を描写し、変化の過程そのものを記録することに意味を置きたい。

変化を記録し、深層まで読み解くためには、本論では「人間の行動としての音楽」(メリアム, 1964)、「音楽は行為である」(スモール 1998) という視点からオルティン・ドーの演奏に関連する様々な行為の分析を試みたい。従来の研究では、歌い手、民謡の収集などにスポットライトを集中するだけで、その周囲の関連する人々の行為は私たちの視野に入りづらくなっていた。

オルティン・ドーの概念、意義も本来のものから変化し、本来もつ社会的・身体的側面を矮小化している。本来「ネール」におけるパフォーマンスに見られる聴者と演奏者、演奏者と場などの緊密な関連性が徐々に薄れつつある。

従来の研究は、対象が芸術性などの価値をもつかどうかにより重点を置いていたために、パフォーマンスに関わる様々な視点から手がける研究によって本研究の独自性を打ち出したいと考えた。

序論において、オルティン・ドーの位置付けと、基本概念を含む本文の骨格を呈示する。本文は二部に分かれ、第一部「概念とその変容」は第一章、第二章から構成した。第一章ではオルティン・ドーの形成された背景的な概念を用いて、第二章「オルティン・ドーの概念」では歴史的展開が述べられ、オルティン・ドーの概念の変化を文献調査の手法によって跡づけた。第二部「諸要素と変化」ではオルティン・ドーのパフォーマンスに関わる諸要素を分析した。第三章「場」、第四章「歌い手」、第五章「聴衆」、第六章「伴奏」、第七章「学習」によって構成されている。

まず第一部において、オルティン・ドーの形成の背景的な概念を用いながら (第一章エスニシティ、歴史、産業) 第二章「オルティン・ドーの概念」においてオルティン・ドーの形成や音楽的

特徴を考察しつつ、オルティン・ドーのテキストとパフォーマンスの考察を行い、パフォーマンス行為の根底にある概念の変化に注目した。

第二部「行為と変容」の中ではまず第三章「場」において、草原の音環境に関する考察からオルティン・ドーが生成された物理的環境、ネールなど儀礼の場の変化、コンサートホールで演奏することによって起きた変化を考察する。

第四章では、オルティン・ドーのパフォーマンスに関わる最も重要な行為者である歌手について考察した。まず、本来伝統の場におけるオルティン・ドー歌手の位置づけ、現代における「歌手」の概念の変化について考察を加えた。そして、あるオルティン・ドー名手の現在の生活環境、精神世界を考察しながら歌手の内面的な変化の一端を解明しようとした。最後によい歌手であるための条件の記述を試みた。伝承の主体となる歌手が経験する音楽創造の過程における身振り、言語や様式などの情報から歌手と周囲とがどのように関わっているかを解明した。

第五章「聴衆」には、オルティン・ドーの継承における聴き手の役割の解釈を試みた。聴者の意識調査、聴衆の育成など様々な側面から、オルティン・ドーにおけるもっとも重要な受容体の経験を考察した。歌への理解が欠如している「消極的な」聴き手の増加の現状をうけ、学校教育に取り組むべきはというオルティン・ドーの演奏者ではなく、まず「積極的な」聴き手を養成していくことでオルティン・ドーの伝承の養成より発展性に富んだ未来像が描けるだろう。

第六章「伴奏」では、伴奏のメカニズム、学習、楽器の新たな選択について分析した。オルティン・ドーの伴奏は従来主にモリンホールやリンベによって行われ、それが「正統的」と見なされる。伴奏としての役割を軽視する傾向がありつつあるのは、伴奏の機能を正確に把握、認識していない証拠である。長い間モリンホールやリンベなどの伴奏楽器は一見非常にシンプルな形-歌手を追うだけで伴奏を行っているふうに見え、楽器による伴奏の役割は人々に軽視される傾向にある。

第七章「学習」では、伝統的な場における学習、音楽専門養成機関における学習のプロセスを明らかにした上で、異なる世代間における学習の変化を解明した。また、現代オルティン・ドーの学習における3つのパターンを呈示し、学習過程を明らかにすることはオルティン・ドーとその変容の理解するための中核的な要素であることを強調した。

本論では、「オルティン・ドー」とは現代的定義であること、第三者による分類法と民間の分類法の差異・相互作用、場の変化、聴衆と歌手の分離・受容体の意識の変化、伴奏の役割・学習・楽器の変化、そしてパフォーマンスの概念や行動を支える学習の変化など諸要素の視点から現代オルティン・ドーの具体的な変化を記述することができた。伝統的文脈の中で、場、聴衆、歌手、伴奏が一体とされ、それぞれの機能の背後に潜んでいるのはモンゴル音楽の音を中断させないという美学の規則が働いていることが文献研究や調査研究を踏まえた上で明らかになった。また、本論では、オルティン・ドーのパフォーマンスの美的価値、文化価値を表すもっとも重要な要素-歌詞、つまりパフォーマンスにおける言葉の素養を強調している。モンゴル語のあらゆる特性がオルティン・ドーをほかの音楽芸術と区別するための素材を提供しているからである。

「正統」的なオルティン・ドーのパフォーマンスはモンゴル語の特性を生かした上で成立するものであると考える。モンゴル語の特性を意識しないパフォーマンスはオルティン・ドーの価値や特性を生かすことが不可能である。その中には、モンゴル語による多様な歌唱法の生成やモンゴ

ル文化の特等を明瞭にするための二つの意味が含まれている。

オルティン・ドーに関わる諸要素の過去の研究の中で、場、歌い手についてそれぞれの視点によって変容を捉えてきたが、聴衆や伴奏に新たに着目したのは本研究の独自性である。受容体としての聴衆の役割、構成、学習、精神世界がいかに変化しているかを考察し、オルティン・ドーの変容に聴衆の変化は大きく関わっているという結論に至った。